
続・インプリンティング

なおこ Naoko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続・インプリンティング

【Nコード】

N0365Q

【作者名】

なおこ Naoko

【あらすじ】

世界が終わった後、残された都市の一つに迎えられた少年ユージ。そのユージを助ける蓮もまた、少年時代に葛藤があった。ユージと蓮を励ましたアクトロイドたちは、同じ深い青のクリスタルガラスの瞳を持っている。そして蓮を目覚めさせるのは、夜空と、雄大な地球の自然だった。

1話 ゼイラの瞳

「充電を完了しました」

そのアナウンスと共に、アクトロイドの美咲は、充電用アルコープの中で目を開ける。

アルコープ・ロックの解除される音が充電室に響く。

自由になった美咲は、前へ一歩踏み出すと背伸びをする。気分がいい。

長い髪の手まで充電されたように思える。

その朝、美咲が目覚めたのは、相互スカイ・スクレイパーの地下にある充電室だった。

薄暗い充電室には、アンドロイドが立って入る充電用アルコープの並んだ列がある。

充電室は都市のあちこちにあり、そのビルの充電室は、一度に百体以上の充電ができる最も大きなものだった。

そこへ、別のアクトロイドがやってくる。

「美咲、珍しいじゃない、こんな時間にここにいるなんて」

美咲は、声のする方を振り向いた。

「香織、久しぶりね、今から充電？」

「そう、私はいつもこの時間に充電しているの、空いているし」
美咲は辺りを見る。

ほとんどのアルコープは空になっていた。

「本当ね、私が来た時は満員だったけど」

「美咲はどうしたの？ あなたは高校へ行ってるんでしょう？」

香織はそう言いながら、美咲の隣のアルコープ・キーボードに自分

のコードナンバーを入れる。

「ええ、試作の内蔵通信機を入れてもらったから、今日は遅刻よ」
美咲は、耳を指差して言った。

「それって、特殊任務アンドロイドが使っている携帯電話を使わなくてもいいのですよ？」

私たちは、通信機能を人間と統一すると、情報管理のために、携帯電話を使わされてるんだけど。
後でどんなだったか教えてね」

「もちろん。じゃ、またね」

美咲は香織に軽く手を振り、更衣室へ向かう。

後ろから、香織が入った充電アルコープのロックされる音がし、アナウンスが聞こえる。

「充電を開始します」

美咲は、更衣室で学校の制服に着替えると部屋を出た。
そこで、ばったりと智之に会う。

「おはようございます。

こんな地下の階にいらっしやるってことは、地下道のお仕事ですか？」

智之は、苦笑いしながら答える。

「僕は腰掛程度だけど、一応、下水道課の人間だからね、そっちの仕事もおろそかには出来ないんだよ。

美咲は今日は遅刻か？」

美咲も笑いながら答える。

「試作の内蔵通信機を付けてもらったので遅くなっただけです」

「ああ、どつ？ 具合は？」
美咲は、ちよつと上を見て答える。

「少し耳鳴りがするかしら・・・まあ、これから調整するらしい
ですけれど」

「それはいつもアップグレードしているみたいだね。

もつと若いアンドロイドで試すつもりだって言ってたが、君が名乗り出たんだって？」

「そうなんです。

ユージったら、私が携帯電話を使う度に、チラッとこつちを見るんですもの」

「警戒されてるか」

「ゲームセンターでは、わざとユージに負けてあげたのに、ほくそ笑むような顔をされるし」

「リ・インプリンティングをいくらかしてるんだが、その部分も覚えてるってわけだね」

「そつらしいですけど、どこまで覚えてるのかを言わないんですよ。

家ではどうですか？」

「別に変わつた所はないなあ。

精神は安定しているようだし、それは君のお手柄でもあるんだけどね」

美咲は、ため息をつく。

「私、なんだか、ゲームをしているように遊ばれているみたいで、やりにくいです。

私の仕事は、ユージの精神面のサポートと、人間の女の子が問題を起こさないように気をつけることなんですけどね。

ユージは、浩太とは仲がいいのに・・・」

智之は、おやおやという顔をして言った。

「まあ浩太は、身を挺してユージを救った恩人みたいなもんだからね」

「私だつてがんばりました！」

美咲はふくれっ面をする。

智之は、そんな美咲に、にやにやしなから言う。

「そこらへんのところを、からかわれてるんじゃないのか？」

美咲が困るなんて初めてだね、いい経験だと思うよ。

君は、まだ3歳なんだし」

美咲は智之に一步近付くと、真剣な顔をして言った。

「そのことを、ぜーったいに、ユージに言わないで下さいね！」

そして、はっとする。

「まさか、浩太は言ってないでしょうね？」

これで失礼します。

浩太に確かめなくっちゃ」

と美咲は、ペコツと頭を下げると、小走りに去りながら浩太に連絡する。

智之は、その美咲の後姿に、ユージがこの社会に馴染んできているのを感じ、微笑む。

そして、すぐに険しい顔をした。

相互スカイスクレイパーの38階、蓮の事務所は、その階の角にある。

蓮はそこで、デスクの上の、古代コンピューターのレプリカを眺めていた。

そこへ、智之が、開いていたドアをノックしながら顔を出す。

「やあ、新しいオフィスはどうだい？」

蓮は立ち上がると智之を迎えた。

「庶務課の大部屋の隅からすると、かなり格が上がりましたね。

いい部屋ですよ。

景色もいいですし」

智之は窓の外を見た。

「そうだね、ついでにアクトロイドの秘書ぐらい置けばいいのに。そう言えば、君の家には、アンドロイドの両親がやってきたんだって？」

蓮は、少し困ったという顔をする。

「そうなんです。

今回は、議会も、徹底してユージの件にあたるみたいです。

美咲の部屋まで作っての念の入れようですよ。

まあその流れで、この宇宙開発関連機構も、会社名にふさわしいオフィスを与えられたって訳です。

それはありがたいんですが」

「本来は名前だけの会社だけど、君としては、長い間、暖めていたプロジェクトだったからね」

智之は、デスクの上のレプリカを見る。

「古代コンピューターか。

完成させたんだ。

これは確か、西暦1973年に復元された物だよな。

そして、君のお父さんが、そのレプリカを作り始めたって言った。もう完成することはないと思っていただけ、君が後を引き継いだんだ」

智之は、そのレプリカの取ってを動かしてみる。

「手動の計算機、しかも、天体の動きをほぼ正確に計算している。ユージもこれを知ってたんだ」

蓮は、智之に向かって姿勢を正すと言った。

「それですが、やはり、誰かが人工衛星を上げているようです」

「そうらしいね。」

こっちにも、今朝、その情報が入った」

「まだ何の目的なのかは調査中ですが、議会は、もう無視できないはずですよ」

「まあ、そうなんだが・・・」

ユージの両親のグループも何の研究をしていたのか知らないが、この存在を知っていたみたいだしね。

元々日本人は、組織力では世界一と言われていたし、今でもこれだけの都市を維持できている。

それを知られていないはずはない。

人工衛星があれば、いずれ誰かがここへ連絡して来るのは明らかだ。とは言え、我々の人工衛星打ち上げに関しては、保守派を動かすのは並大抵じゃないんだ。

とにかく、その計画書を見せてくれないか？」

蓮は、計画書の厚い書類を智之に渡す。

「いつか君は、これを言い出すだろうとは思っていた」

智之は、その表紙を見ながら言った。

「ユージと美咲の事件の報告書にあったが、『冷たい瞳』か・・・美咲があれを言うだなんてね、驚いたよ」

「美咲の瞳は、クリスタルガラスですからね」

そのことに踏み込まれるのを苦手にしている蓮は、思わず、腕を組みながら答える。

「その瞳が、君に生きるよう励ましたんじゃないか」
智之は蓮を見上げると言った。

「だから、冷たいんじゃない、むしろ、さわやかな冷たさだったんだ」

その智之の言葉に、蓮は少し緊張を解く。

「そうですね。」

ユージにも同じように伝わってたらいいですね」

「そうでなくても、いつか伝わるよ」

「ユージは、救出された時、絶望の底にいたんでしよう。」

悲しみの中で、まるで消えた炎のように動きを止めようとしていて、生命力も衰えていた。

あのままでは、インプリンティングをしても、どこかに精神的な障害が残ったと思います。」

ただ時間を送り、日々を繰り返し、沈黙するだけの毎日になったかもしれない。」

刹那的な生き方は、とても魅力的ですからね」

「その恐れはあったね。」

それでも、ユージには強い思いが残っていた。

そのかすかな過去の記憶をたどって立ち上がり、生きる戦いをするため浮かび上がろうとしたってことか。」

「智之さん、今日は珍しく詩的ですね」

蓮が笑いながら言うと、智之も笑って答える。

「君につられたんだよ」

「でしたら、あのユージと浩太が言ってた月面のような荒野だつて生き返りますよ。」

あそこの枯れ草は、春に芽吹いて、夏には草原に戻るんです」

「草原か・・・」

智之はそう言つて、遠くを見るような目をする。

「議会は、ユージの過去を懸念しているところがありました。」

この社会への影響も考慮しなければなりませんでしたしね。」

だからユージの記憶を消して、潜在意識の中にだけ押し込めたんですが、美咲の起こした火事によつて記憶は戻つてしまいました。」

ちよつと危険な賭けでしたが、結果的には上手くいつて良かったです」

「上手くいったのは、ゼイラの瞳があったからと思つかい？」

蓮は、智之を見る。

そして、少し笑つとそれに答える。

「偶然でしょう」

「君は今まで、アンドロイドを使わなかったよね。」

やはりゼイラは特別だったか」

「さあ・・・」

とにかく、いつまでもアンドロイドを使わない訳にはいきませんよ。特にユージは高校生ですから、美咲や浩太のようなアンドロイドは必要です」

「君が、美咲にゼイラの瞳を付けたのも、それなりの思いがあったからだろう？」

「そうですね・・・」

ゼイラの瞳は特別で、とても美しい深い青のクリスタルガラスです」

「ユージの気持ちが一番分かるのは、君かもしれないね」
「どうぞでしょう。」

それに美咲は、ゼイラとは全く違うタイプのアクトロイドですし」

「そうかな？」

その智之の問いかけに、蓮は驚いたような顔をする。

「美咲はゼイラと似た所があると思うよ。」

だから君は、美咲の前の失敗をかばって、彼女と組むことにしたんじゃないのか？

それに君は、左手に、しなくてもいい傷を負うなんて無茶もするし」
蓮は自分の左手の傷跡を見る。

そして智之は、蓮がゼイラについて話したがらないのを知っているので、目を書類に戻して続ける。

「美咲は今回もまた問題を起こしたけど、人間の心に反応するアクトロイドになりつつある。」

そのための新しい型だからね。

議会もそれを認めたから、美咲はラボラトリー送りにされずにすんだんだ。

やり方はまだ幼稚だけど、これからあの子は成長するよ。

ゼイラは成長できなかったけれど・・・」

蓮はそれには答えなくて、窓の方へ行き、智之に背を向けて外を見る。

智之も書類のページを捲り、それ以上何も言わなかった。

遠く of 山脈に雪が降り、その白い屋根が、美しく、そして険しく連なっている。

山は短い夏を終え、秋が過ぎ、長い冬に入った。

その山の雪は、春になると解け始め、土地を潤し、緑が美しい夏の季節に戻り、自然は繰り返される。

蓮は、その山で暮らした最後の夏を思い出す。

2話 古代コンピュータ

一台のピックアップトラックが、都市を離れ、山道を上っていく。蓮は、母親の美恵子が運転する隣の助手席で、窓の外を見ていた。山は長かった冬を終え、短い春から夏へと移ろうをしている。

季節の移り変わりは、何千年何万年も前からこうしてやってくる。「変わってしまったのは人間の方なんだ」と蓮は思った。

もう少しで16歳になる蓮は、高校へ上がる前の試験と、定期の身体検査や歯の治療などのため、数日間ほど都市へ出かけていた。そして、父が働く天文台の近くにある家へ戻る所だ。蓮は、幼い頃から両親とそこで暮らしている。

都市は、この山の中とは比べ物にならないほど賑やかだった。面白そうなものがたくさんある。

それでも蓮にとって、都市での生活は、さほど魅力的には思えなかった。

もちろん、山の生活よりはましだと思う。

こんな山奥で遊び相手のいない蓮にとって、都市の同じ年頃の子たちと遊ぶ方が楽しいはずだ。

それなのに、なぜかむなしさを感じる。

ほとんどの都市の人間は、自分たちの都市の周りに何もなくて、世界が終わってしまったのを知らない。

そのシエルターのような都市で、普通に楽しく生活し、世の中がそのまま続いていくと思っている。

都市での生活のためのインプリティンクをされていない蓮は、その現実を知っている。

蓮はそれをどうこう言わないけれど、何か釈然としないものも感じていた。

美恵子は運転をしながら、時々蓮に話しかける。

それは、学校のこと、試験のこと、街の様子や、買い物、祖父母や親戚の家でのこと。

蓮は、気が向けば適当な返事をする。

最近の蓮は、いつも不機嫌で、会話をしたからない。

母親の美恵子は、蓮が多感な時期にいるのは分かっていた。

「この先を曲がれば、もう、都市は見えなくなるわね」

その美恵子の言葉に、蓮は反射的に後ろを振り向く。

手前の山々の向こうに田園が広がり、そのかなたに都市のビルの群れが煙ったように見える。

蓮にとつて、それは遠い世界のように思えた。

「蓮は、この秋からあそこの高校へ行くのね」
美恵子が言った。

父の俊樹の天文台は、都市の三方を囲む山脈のかなり奥の方にあった。

光害を避けるためだ。

そして、空気も出来るだけ薄い方がいいので、高度は高く、山々の頂が良く見える。

その奥も高い山々が連なっているので、山と空だけしか見えない。

その向こうには何も無い。

蓮は、世界が終わったのを知っていたけれど、自分の目で確かめたことはなかった。

「それにしても、この山道はひどいな」と蓮は揺られながら思う。

俊樹の天文観測は、天文学の分野だった。

とは言え、実際の仕事はこの天文台の維持管理が主で、それにかかりの時間と手間がかかっていた。

天文学の研究者だけでなく、技術者としての仕事、さらには建物や家の修理、山道の補修までしなければならぬ。

ブルドーザーを運転して、冬の間、雪崩で崩れた道を直すことさえする。

そうしている内に俊樹の様相は、天文学者と言うより、山男のようになつていった。

美恵子は主婦で事務担当だ。

大学の事務室で働いていた美恵子は、そこで講師をしていた俊樹に会い、二人は結婚した。

蓮が生まれた後、俊樹は天文台での生活を選び、家族でここへ移つてくる。

俊樹は、都市のやり方に異論はなかつたけれど、それに従つて生きる気もしなかつた。

天文台の維持は大切な仕事だったが、アンドロイドでも出来ないこととはない。

それでも俊樹がここへ移ることは、自分にとつても、都市の議会にとつても都合のいいことだった。

俊樹は、ゆつくりだけど、自由に自分の研究が出来る。

そして議会にとつても、この天文台を人間の手で維持してもらえぬ。

そして俊樹の助手として、議会は古い型のアクトロイドをよこしている。

名前をゼイラといった。

蓮と美恵子のトラックが走っていたでこぼこ道は、急に平坦になつた。

家に近付いたのだ。

家の前では、父親の俊樹が薪割りをしていた。

夏とはいえ、山の夜は寒くなる。

それに夏に、冬のための薪の準備をするのは大切な仕事だった。

とは言え、この年の冬は、ここには誰もいないので冬の薪は必要ないはずだ。

薪割りをする俊樹は、自分も妻や息子と共に都市へ降りるかどうか、まだ迷っていた。

トラックは家の前に止まる。

そして蓮は、薪を割るのを止めて顔を上げた俊樹が、機嫌の悪いのに気が付いた。

「蓮、こっちへ来なさい」

蓮は、俊樹の後に付いて家の裏にあるラボラトリーへ向かう。

二人がラボの中へ入ると、中央のテーブルの上に、作りかけの古代コンピューターが置いてあった。

「これを説明してくれないか」

俊樹が言った。

そして蓮は考える。

それは父のもので、蓮が勝手に持ち出したものだった。

もちろん、蓮は、これが父にとつて大切な物なのは知っている。

ところが父は、ここへ来た時だから一度もこれに触れていない。

蓮は、それには理由があるのだろうと思っていたが、この古代ギリシャのコンピューターが気になっていた。

その興味は、年齢が増す毎にさらに強くなる。

この夏を最後に山を下りる蓮にとって、これが最後の、古代コンピュータに触れるチャンスかもしれない。

蓮は、このレプリカを注意深く倉庫から取り出し、自分の秘密の

場所に隠しておいた。
誰も知るはずはない。
いや、知っているやつがいる。
ゼイラだ。

「どうなんだ？」

俊樹はもう一度聞く。

蓮は、覚悟を決めて言った。

「倉庫で見つけた。」

どうしても、この構造を知りたかったんだ」

俊樹は、しばらくの間、何も言わなかった。

それは蓮にとって、とても長い時間に思えた。

「この次に、これを持ち出す時は、父さんに聞いてからにしない」

俊樹はそれだけ言って、蓮に美恵子が荷物を降ろすのを手伝うように言う。

そして自分は、そのレプリカを見続ける。

蓮はラボを出ながら、父の背中に、自分が、父の触れてはいけないものに触ったような気がした。

蓮は気が沈んでいた。

そのレプリカをちよつと調べ、父に悟られないように、すぐに返すつもりだった。

もちろん、都市へ行く前に返せば良かったのだ。

ただ、そのあまりの精密度に興味を引かれ、なかなか返せないでいた。

ゼイラが知っているのは分かっていたけれど、ゼイラは自分の仕事しか理解しない。

だから、ゼイラが言うはずはないと思っていた。

ゼイラは、情報処理を目的としたアクトロイドで、人間と言うよりロボットに近く、感情表現もない。

女性型なのは、人間社会の中で秘書のような働きをする目的で作られているからだ。

体は少し丸みがあるだけだ。

服は、体を保護するためのウエットスーツのようなものを着ている。髪も申し訳程度に頭に張り付いたような感じで、女性型と言うほどの魅力もなかった。

ゼイラは、俊樹の助手となった時、当時は小さかった蓮のために多少の子供を扱う情報は入れられている。

特に、子供の安全を守るようにプログラムするのは重要だった。

もし蓮が山の中で迷子になっても、人間の母親のように人肌ほどの熱を出して、蓮が凍えないようにする機能もある。

とは言え、子供相手のスキルはお粗末で、蓮にとってはかなり物足りないアクトロイドだった。

蓮は、トラックから荷物を下ろすと家へ運ぶ。

そして運び終えると、キッチンへ行き、美恵子が作ったサンドイッチを摘んだ。

「もう少して夕食だから、あまり食べないでね」

蓮は、母親を無視して二つ目を取ると、キッチンから庭へ出た。

外は、夏の長い昼の太陽が、その光を斜めに落としている。

蓮は、その光の中をサンドイッチを食べながら天文台へ向かった。

そこにゼイラがいるはずだ。

ゼイラは、父の仕事の助手をしていることの方が多い。

ゼイラと美恵子は、ここでの生活をサポートしながら、お互いに効率よく働いていた。

「うらぎりもの」

蓮は、ゼイラを見つけると言った。

ゼイラは振り返る。

「何でしょうか？」

ゼイラは蓮に言った。

「父さんに、古代コンピュータのレプリカのことを言った？」

「先生に、見当たらないものがあるので、どこにあるのかと聞かれました。」

その場所を答えただけです」

「だから、うらぎりものなんだ。」

父さんは、それで悲しい思いをしている」

ゼイラは、蓮の言った意味を理解できない。

蓮には、この古い型のアクトロイドに言っても仕方のないことは分かっていた。

そして自分が悪くて、ゼイラに理不尽なことを言っているのも。

それでも、ゼイラが黙っていてくれたら良かったのにも思っている。

たとえ父に疑われても、置き場所を間違えたという風に出来たかもしれない。

それは卑怯なことだとも分かっている。

そんなことを考えている自分にも腹が立つ。

蓮は、どうしようもない自分への怒りを、ゼイラにぶつけていた。

「だからお前はだめなんだ！」

蓮は、そう言っただけその場を立ち去る。

後に残ったゼイラは、何事もなかったかのように自分の仕事へ戻っ

た。

キッチンで、俊樹は、美恵子が入れたお茶を飲みながら言う。

「蓮は難しい年頃になってきたな」

美恵子もうなずく。

「そうね。」

蓮は、ここを持って余しているんだわ。

都市へ降りるかどうか迷っていたけれど、その方がいいのかもしれないわね。

でもあのレプリカの事は、仕方がないんじゃない。

蓮は、ああいうのが好きだし」

「それは分かっている。

まあ、あれをそのままにしていたのは、自分を封印していたこともあったんだ。

あまり意味のないセンチメンタルなだけだね。

だから蓮が、あれを黙って持ち出すなんてことになってしまった。

もちろん、自分ではない物を、許可なく持ち出すのは良くない。

とは言え、そのきっかけを作ったのはこっちだから、怒るに怒れないね」

「この夏で、この生活も終るわ。

あなたは時々ここへ通うことになっても、蓮は、もう戻ることはないかもしれないわね。

もしインプリンティングするのであれば、ここでの記憶も無くなるかもしれないし」

「そうだね・・・」

と言って、俊樹は言葉を区切る。

「今まで蓮をパーシヴァルに連れて行くかどうかを迷ってたんだが・
・
最後に行ってみるか」

3話 パーシヴァル

山の夏は早い速度で進んでいた。

気候も良く、一番活動しやすい夏は忙しい時期で、いつもの年なら冬のための準備もある。

秋にはここを去るつもり俊樹と美恵子にとって、今年の冬への心配はない。

その代わり、ここでの生活を閉じる準備に忙しかった。

もちろん蓮も手伝う。

とは言え、いつもと違った忙しさで、蓮が両親に接する時間は少なかった。

それは、蓮には都合が良かった。

色々なことが煩わしく思えたからだ。

それに、都市へ帰るといふ緊張もあって気持ちが不安定だった。

蓮は大きな古い木の枝に座り、木の幹に寄りかかり、草を口にくわえ、夏の虫が飛ぶ音を聞く。

ここにいと時間が止まったように思える。

もしかしたら、本当に止まってしまったんじゃないかとも思う。

「蓮」

父の俊樹が呼んだ。

「明日、パーシヴァルへ行くから準備をしなさい」

蓮は俊樹を見る。

「パーシヴァル？」

「谷の湖だ。」

2泊3日だから、装備をちゃんとするんだぞ」

俊樹はそう言って去っていった。

今まで、父とバックパックで山歩きをすることはあった。もう15歳だし、かなりの荷物は背負えるようになっていた。今年の夏は忙しいから、これが最後の、ここでのバックパックになるかもしれない。蓮は、そう思いながら準備をする。

キッチンで、美恵子から食料を調達する時、美恵子が言った。「パーシヴァルって、『谷を駆け抜けるもの』って意味があるのよ。誰がその名前を付けたのかは知らないけれど、反対側へ抜けられる谷の湖なのよ」

「え？じゃあ、反対側へ行くの？」

「さあ、恐らく今は、抜けれないんじゃないかしら。」

あそこは、夏の初めじゃないとだめだから」

「母さんは、行ったことがあるの？」

「湖のこちら側だけね。」

とても美しい所だから、蓮も見ておいた方がいいわよ」

次の朝早く、俊樹と蓮は家を出た。

美恵子は、ただじっとその二人の去っていく後ろ姿を見つめる。

「奥様、今日はこちらで仕事をされますか？」

ふいにゼイラが声を掛ける。

美恵子はゼイラを振り向くと、笑いながら言った。

「そうね、うるさいのがないから、私たちがゆっくり仕事をしましょ」

ゼイラは、その意味を理解できないので、黙って次の指示を待つ。

「書類をこのキッチンへ持ってきてちょうだい」

美恵子の指示に、ゼイラは書類を取りに行った。

俊樹と蓮は、野を超え山を越え、小川を渡り、滝を見ながら進んでいた。

ここには登山道などない。

俊樹は、コンパスと地図で進路を決める。

蓮もその使い方は知っている。

その夜は、森の中の川から少し上の、平らな場所にテントを張り、火を起こした。

そして美恵子が準備した夕食を暖める。

この山には人間を襲う危険な動物はいない。

それでも、夜の闇は不思議な恐れをかもし出す。

その恐れとは、もしかしたら自分の心に存在するものなのかもしれないと蓮は思う。

ここには、自分と父以外に誰もいないのだから。

父は、何も言わない。

蓮も何も言わない。

二人は、しばらく黙って炎を見ていた。

そして俊樹は、小さくなりかけた火に薪を加えると立ち上がり、蓮に言った。

「付いて来なさい」

蓮は、俊樹の後を歩く。

しばらく行くと、少し開けた所に出た。

もう焚き火の灯りは見えない。

月はなく、空には星が広がり、天の川が空の端から反対側に広がっている。

天文台からもそれは見えるけれど、蓮は、最近は夜空を見ることはなくなっていた。

特に、このように、何の光もないところで見る星空は久しぶりだった。

時々、流れ星が現れては消えていく。

「昔は、よく人工衛星が飛んでいるのが見えたそうさ」

「人工衛星？」

「数千機の人工衛星が、この地球を回っていたらしい。」

静止衛星つてのもあったけど、低い高度の物は、この地球をたった1時間半ほどで一周したそうさ」

「知ってるよ。」

引力と遠心力の釣り合いで回るから燃料はいらないし、太陽電池で仕事も出来るから効率がいいんだ」

「今は、活動不能のスペースデブリでしかないけどね」

「見えるかな？」

「見つけれないこともないが、ここに寝袋を持ってきて捜してみるか？」

「父さんは？」

「テントで寝る」

「じゃあ、俺もテントで寝る」

俊樹は少し笑うとまた星空を見上げる。

二人は長い間、夜空を眺めていた。

次の朝、蓮がテントから這い出ると、俊樹は朝食の準備をしていた。

「テントをたたみなさい。」

朝ごはんがすんだら、出かけよう」

二人は荷物を背負うと、再び歩き始める。

しばらくすると、前の山が二つに割れ始めた。

パースイヴァルに近付いたのだ。

谷の間に、明るい空色の湖が見えてくる。
そして、その湖に向かって降りていく。
俊樹は、湖畔の近くにある小さな小屋に向かった。

「こんな所に小屋があるの？」

蓮は聞いた。

「ああ、ここも父さんが管理しなければならぬんだ」
中に入ると、そこには一台のカヌーがあった。

「カヌーの漕ぎ方を教えてやるから外に出すのを手伝いなさい」
二人はカヌーを外に出すと湖に浮かべた。

蓮はカヤックを漕いだことはあったけれど、カヌーは初めてだった。

そして、カヌーを、カヤックを一人で乗る時と同じように一人で漕ぎたがる。

「一人で漕ぐなら、カヌーはカヤックより難しいんだ」

俊樹は言った。

この時の蓮は、この湖の美しさを見るより、カヌーを操ることの方に興味があった。

そうして二人は、しばらくカヌーを漕ぐと小屋に戻ってきた。

俊樹はカヌーの状態を確かめ、小屋の壊れた所を修理するとドアを閉めた。

「これで、数年はだいじょうぶだな」

「このカヌーは何のためにあるの？」

蓮は聞いた。

俊樹は蓮を見て言った。

「この湖の反対側へ行くためのものなんだよ」

「そこには何があるの？」

「この世の終わりだ」

「え？」

俊樹は、悪かったという風に笑った。

「いや、この山脈の反対側に出るんだ」

「今日はいかないの？」

「水量が少なすぎる。」

行くなら夏の初めだな。

雪解け水がこの湖を満たしたら、向こう側に行ける。

ここは水がまだあるが、向こう側は泥が深くて岸にたどり着けないんだ。

湖の出口は広がっていて、岩や木などの障害物で水の流れが遅くなっている。

水は、いくつもの小さな川に分かれて山脈の向こうへ降りていくんだ。

嵐でもきて、水かさが増えたら別だが、今は無理だ」

「父さんは、向こう側に行ったことがあるの？」

「あるよ、まだ蓮が小さい時にね。」

その後、母さんもここに連れて来たけど、その時は向こう側へは行かなかった」

「そこはどんなところだったの？」

俊樹は蓮を見ると微笑んだ。

「いつか機会があつたら自分で見てみなさい」

そして、二人はその湖を後にした。

その夜、二人は再び、焚き火を起こし、それを見つめていた。不意に、蓮は立つ。

「トイレ」

と言って、そこを離れる。

用足しをした後、蓮は空を見つめる。

山の空気は冷たい。

蓮は震えながら、そのまま空を見つめていた。

その時、空にすーっと光るものを見つけた。

初めは流れ星かと思った。

だが、なかなか消えない。

それは、あつという間に星の夜空を渡り、夜の木々の向こうへと消えていった。

蓮は、息を弾ませ、俊樹の元に戻ってきた。

「父さん！ 人工衛星を見たよ！ あれはそうだ！ まだ残ってたんだ！」

俊樹はニコニコしながら言った。

「そうか、お前も見たんだけ。」

それで蓮は、はっとした。

「父さんも見たことがあるの！？」

俊樹は笑顔で言った。

「もちろん」

「俺は今まで見たことはなかったのに！」

「いや、天文台からも見えるんだよ。」

前にお前にも見せたんだけど、あまり興味がなかったみたいだし・

・

俊樹は、頭を掻きながら言った。

蓮は、「そうだったっけ」と思う。

俊樹には、その意味が分かっていた。

蓮は成長しているのだ。

もしかしたら、この山の旅が蓮を変えているのかもしれないと思う。

「あんなにきれいに見えるなんて、誰かが使っているのかな？」
「使われてないと思うよ。」

調べてみたけれど、機能しているものはなかったね。

だからスペースデブリでしかない」

「父さんは、それを調べるのも仕事なの？」

「いや、だけど見つけるのはそう難しいことではないんだ。」

宵の口か明け方だと、太陽の光に反射して良く見えるね。

父さんの研究は、天体を物理学的に調べることだから、人工衛星があればいいんだけど、そんな余裕はないからね。

だから、この地上から観察していた古代人のコンピューターを面白いと思っただんだ」

「そうだったんだ」

「あれは蓮にやろう」

「え？」

「もう、父さんには必要ないから、お前が完成させなさい。」

ただし、完成させるためには、かなり勉強しないとだめだな。

それに、アートのセンスもいる」

俊樹はふふつと笑う。

「それが父さんに欠けていたのかもしれないね」

「父さんは、完成させるのを諦めるの？」

俊樹は蓮を驚いたようにして見る。

「諦めるんじゃない、違う道へ行くこうとしているんだ。」

お前は、お前の道を見つけないさい」

「俺の道？」

「その内、見つかるさ、自分のしたいこと」

「そんなのあるのかな？」

「あるといいね」

俊樹には、蓮に伝えたいことがあったけど、なかなかそれを切り出せないでいた。

「あの古代コンピュータは、紀元前に作られたものなんだ。だけど、それよりかなり前に完成されていた技術だと言われている。おそらく、それより数千年も前にね」

「そんな精密な機械類が何千年も前に存在してたの？」

「あつたんだろうね。」

だから、世界中あちこちの古代遺跡の中から、その痕跡を見つけたりするんだ」

「それは、ピラミッドやオベリスクをどのように建てたのかってこと？」

「それもあるね。」

未だに謎だしね。

古代人は、今の我々より、もっと高度な技術があつたってことなんだろう」

俊樹は、思い切って聞いてみる。

「蓮、お前は、世界が滅んでしまったことに喪失感をもっているのか？」

蓮は、それには答えない。

自分のことすら分らないので、答えられないのだ。

俊樹は続けて言った。

「父さんは、古代に一度、世界は滅んでしまったのかもしれないと思っっている」

「え？」

「彼らは自分たちの技術を正しい目的で使うことが出来ず、その世界を滅ぼしてしまったのかもしれない」

「それだから、古代コンピュータ？」

「そうだね、あの精密度は深い謎だ。」

もし古代人にその知識があつて、それを正しい方向に使えていたら、世界はもっとすばらしかつたんじゃないのかな」

「じゃあ人類は、また同じ間違いを犯してしまつたつてこと？」

「さあ、どうなんだろうね。」

もし、そうだとしたら、蓮、お前は どうしたい？」

蓮は、焚き火の炎を見た。

そして思う。

自分は どうしたいのだろう、と。

4話 嵐の夜

蓮と俊樹がパーシヴァルから戻ってきて、俊樹と美恵子はますます忙しくなった。

蓮は手伝うこともあるが、技術的なことになるとあまり役には立たない。

さらに、機能が限られているゼイラも仕事のない時があったりする。

その日、蓮は、ゼイラを連れてツリーハウスへ向かった。

そしてツリーハウスを見上げながら、ゼイラに言う。

「もう俺は、ここへ戻ってくることはないかもしれない。」

お前が俺の代わりにここを管理してくれ」

それはまるで、自分も父のように、ゼイラに何かをやらせようとしているかのようだ。

ところが、ゼイラの答えは蓮を驚かせる。

「私は、この秋で解体されることになりましたので、それは出来ません」

蓮はゼイラを見ると言った。

「何だつて？」

「私は、現存するアクトロイドの中で最も古い型です。」

私の他には4体しか残っていません。

今回、すべてのゼイラ型の解体が決定されました。

私は一番最後に解体されることになっています。

私の部品は他に利用されるか、解かされて新しい部品を作ることになります」

蓮は、そのゼイラの言い方に腹が立った。

「お前は、自分が解体されることに何も感じないのか？」

ゼイラは無表情のまま蓮を見る。

「ゼイラ型は人間のように感じませんから、私は何も感じません」

「お前が死ぬってことなんだ！」

ゼイラは淡々と答える。

「死は生の反対です。」

私は生きていないので、死ぬこともありません。

あなたの言っていることの意味が分かりません」

蓮は、ゼイラが死ぬことに違和感がないのに不思議な気持ちがあった。

もちろん、蓮は死について知っている。

倉庫の穀物などの食料をねずみなどから守るため、猫が3匹いたのだけれど、1匹が数年前に死んでいる。

犬も、スカীগという名の大型犬が、母の家庭菜園を野生動物から守っていたが、1年前に死んでしまった。

スカীগは、どちらかと言うと父の俊樹の犬だった。

子犬がやってきた時、小さかった蓮は、犬の扱い方が分からずに苛めてしまったらしい。

蓮にはその記憶はないのだが、スカীগを可愛いと思った時にはすでに遅く、どんなに努力してもスカীগは父の方が好きだった。

とても賢い犬で、死んだ朝も、犬小屋でいつものように寝たまま、息が途絶えてしまったらしい。

寿命だった。

蓮は、父が、その犬小屋の前で悲しそうに立っているのを何度か見ている。

動物は、人間のように死について考えることはない。

それは、厳しい自然の中で生き、長く生きられない動物たちにとって自然的必然性だ。

だが人間は違う。

人間は、死について考える。

蓮が、ゼイラの態度に釈然としないのは、ゼイラが人間の言葉を話すからかもしれない。

それにゼイラは、蓮が物心付く前からいる。

だから、いるのは当たり前のように思っていた。

もちろん、この秋に、ここを去るに伴って変化があるのは分かっている。

それを思えば、ゼイラにも変化があつて可笑しくはない。

とは言え、解体は全く考えていなかった。

そして蓮は、このことに自分が動揺しているのにも驚いていた。どちらかと言うと、ゼイラを煩わしく思っていたからだ。

能力の劣るアクトロイドで、父の仕事のための機械のようなものだった。

解体という現実には、自分は、なすすべもないことも知っている。

しばらくの間、蓮は黙ってゼイラを見ていた。

そして思った。

ゼイラはアクトロイドで機械なのだから、「死ぬ」というのは大げさかもしれない。

「じゃあ、お前の最後の前に、俺の基地を見せてやるっ」

蓮は、ツリーハウスの梯子を上った。

そして、ツリーハウスの入り口から下にいるゼイラを呼ぶ。

「上って来い」

ゼイラは動かない。

「どうしたんだ？」

ゼイラは答える。

「私には梯子を上る機能がありません」

蓮は、ため息をつく。

そして、下りて来ると言った。

「分かった、下から支えてやるから何とか上れ」

ゼイラは、少しひるんだ様子を見せる。

「何だ？」

蓮は言う。

「その指示を撤回していただきたいのですが」

蓮は、ゼイラをにらむ。

この夏の昼下がりがり、することが他に何も無い蓮にとって、これは面白そうな挑戦だった。

蓮はゼイラを先に上らせ、自分はゼイラの後から上る。

時間はかかったが、やっと蓮はゼイラをツリーハウスに登らせるのに成功した。

ツリーハウスの中は、テーブルとベンチ代わりの小さなベッドが壁際に付いている。

そのテーブルの上には、蓮のお気に入りのガラクタが置かれていた。それらは、蓮が子供の時から集めていた、機械の破片や石や木切れなどだった。

ゼイラは、そのテーブルへ行き、ガラクタに触れながら言った。
「あなたが好きな物ですね」

蓮はそれを聞いて、少し恥ずかしい気がした。

ゼイラは感情がないから、自分のガラクタをどうこう思う訳ではない。
とは言え、改めて言われると変な感じがする。
15歳の少年にとって、そのガラクタは、すでに価値のない物になっていた。

「そんなことはどうでもいいよ」
蓮は無愛想に言う。

そして、ゼイラの左手に傷があり、中の機械が見えているのに気が付く。

その傷は、ゼイラが梯子を上る時に付いたものだった。
そして蓮は、ゼイラは、結局、機械なのだと思う。

生き物ではないから、傷の痛みなど感じることもない。
ゼイラには、自分が解体されるのでさえ、どうでもいいことなのだから。

その後、蓮は困ったことになってしまった。
ゼイラをツリーハウスに上げたものの、下ろすことが出来なかったのだ。
結局、父を呼び、ゼイラを下ろしてもらった。

それから蓮は、ゼイラを避けるようになる。
ゼイラに係わるのは御免だと思ったのだ。
それに解体されるなら、これ以上、ゼイラと親しくなるのはいやだった。

蓮はゼイラを気にしながら、ゼイラが自分の心に入ってくるのを拒んでいた。

蓮は、することのないゼイラが、時々、うつむいたようにじっと立っているのを見かけたりする。
それでも、ゼイラに声をかけなかった。

そして、嵐が来た。

夜中に風と雨の激しく窓をたたく音が、蓮を目覚めさせる。

小さなランプが、部屋を薄暗く照らしていた。

突然、蓮は、ゼイラが自分の部屋に立っているのに驚く。

「ゼイラ、ここで何をしてるんだ!？」

ゼイラは壁際に立つ像のようで、起き上がった蓮を見ることなく答える。

「あなたのご両親が、私にあなたを見ているように言われました」

「父さんと母さんはどこだ?」

「天文台です。」

修理中の壁を補強するためにそちらへ向かわれました。

私はあなたを見守るように指示されています」

蓮は、やっと状況を把握した。

「分かった。」

とにかく、俺は大丈夫だから、自分の部屋へ戻ってくれ」

ゼイラは蓮を見る。

「私の部屋とは?」

蓮は思い出した。

ゼイラに自分の部屋はない。
あるのはラボの充電用アルコープだけだ。
それで蓮は言った。

「お前のアルコープへ行ったらいいだろう?」

「アルコープは、この家にはありません。」

それに、私は充電の必要はありません」

「じゃあ、どこかへ行けよ」

「どこへ行けば良いのでしょうか?」

「そんなこと知るか!」

蓮はブランケットを頭から被ってゼイラに背を向けた。

ゼイラは、そのまま壁側に立っている。

蓮は、それを無視して寝ようとした。

外の風はますます強くなり、窓は振動し、その音を伝える。
そして確かに、両親がこの家にいないのは心細いと思った。

蓮は再び起き上がるとゼイラに言う。

「この部屋にいるなら、せめてそこに立って俺を見下ろすのはやめてくれないか」

ゼイラは答える。

「では、どうしたらよいのでしょうか」

蓮は、考える。

「どうしたらって、立つ意外にどうしたらいいんだ?」と思う。

ゼイラには座る機能はあるけれど、座っても見られているような気がするのには変わりない。

「じゃあ、お前も横になればいいだろ?」

ゼイラは再び困惑する。

「私には横になる機能がありません。」

倒れた時に起き上がる機能だけです」

蓮はため息をついた。

「またか」とも思うが、ゼイラが自分で起き上がれるのなら、以前のような問題にはならないはずだ。

それに、こんなくたらない問答でも、少なくとも蓮に嵐への不安を忘れさせているのも事実だった。

蓮はベッドを降り、自分が床に横になってみせる。

「こつこつ風に横になるんだ！」

しばらくの間、ゼイラは床の上に横になった蓮を見下ろしていた。

蓮は、ゼイラはいつたい何をしているんだと思う。

こんなことならゼイラを無視してベッドに戻るうかと思っただけの時、ゼイラは蓮の隣に横になった。

床の上で、横になったゼイラは蓮を見つめる。

蓮は、少し驚く。

今回も自分の言い出したことだったけれど、考えてみればゼイラの行動は普通ではない。

ツリーハウスに上ったゼイラも変だった。

父も、よくゼイラにそんなことをさせたものだと思っていた。

ゼイラには梯子を上る機能はないので、上る前に混乱し、動きを止めてしまうらしい。

おそらく、たった今、蓮が指示したことも、ゼイラに出来ないはずだった。

そう思いながら、蓮もゼイラを見つめ続ける。

蓮は、こんな風にゼイラを見つめるのは初めてだった。

そして、ゼイラの瞳が美しいのに気が付く。
その吸い込まれるような瞳に見とれていると、嵐の音は遠くへ行っ
てしまったかのように思える。

ゼイラは、自分が生きていないと言う。
では、冷たいのかと思う。

「ゼイラの瞳は冷たいの？」

蓮は、訳の分からないことを思わず口にしてしまった。

ゼイラの体には、人肌ぐらいの熱を出す機能があることを知って
いたのだ。

ゼイラは、しばらくして、それに答えた。

「私の瞳はクリスタルガラスですから、冷たいかもしれません」

「クリスタルガラスって高価なんだろう？珍しいよね」

「今はゼイラ型にしか使われていません」

「じゃあ、ゼイラ型がなくなるって事は、もう、お前の瞳はなくな
るんだ」

「私の瞳は冷たいですか？」

今度は、ゼイラが聞いた。

蓮は、何て答えようかと考える。

「ゼイラは、その瞳で何が見たいの？」

ゼイラの質問には答えずに、自分が、また訳の分からない質問をす
る。

ゼイラは、少し混乱したようで、その答えも不確かなものだった。

「あなたの見たいものが見たいです」

蓮は、自分の見たいものが何なのかを考える。

そんなことを考えたことはなかった。

大体、自分のやりたいことは何なのだとも思う。

都市に行くこと？高校へ行くこと？大人になること？それとも、このままにいること？

「世界を見たい。

父さんが言った、この世の終わりだ」

突然、蓮は言った。

「そうだ、父さんが言っていたあの場所、あそこが見たい」と蓮は思う。

その後、蓮は何も言わず、ゼイラも黙っていた。

嵐の音は、ますます強くなる。

蓮は、その音を、床の上で横になって聞きながら、そのまま眠りについていた。

5話 谷を駆け抜けるもの

朝、蓮は自分のベッドの上で目が覚めた。

嵐が去っているのに気付く。

そして、自分は床の上で寝ていたはずだと思う。

いつベッドに戻ったのか覚えていない。

そもそも夕べのことは、夢だったのかもしれないと思ったりする。

蓮は着替えると、美恵子のいるキッチンへ行った。

朝ご飯のいい匂いがする。

「母さん、夕べはどうだった？」

美恵子は振り向いた。

「修理中の壁は守れたけど、急いで終わらせた方がいいみたい。

これからまた天文台へ戻るから、蓮はこの家の周りの掃除をお願い

ね

「うん」

蓮は、準備中の朝食をつまみ食いしながら答える。

「さて」

と蓮は、朝食を済ませ、家の外に出ると言った。

あちこちに木の枝が落ちている。

蓮はそれらを拾いながら、ゼイラはどうしているのだろうと思う。

そして、ひと段落するとラボへ行ってみた。

ゼイラはアルコープで充電中だった。

蓮は椅子を持ってくると、その前に座ってゼイラを見る。

充電用アルコープは、乾電池の充電機を縦にしたような形をしている。

人間のように横になる必要のないアンドロイドは、立ったまま充電する。

ゼイラは目を瞑っていた。

蓮はそれを見ながら、ゼイラは解体されるのだと改めて思う。

確かに、その体はすすけていて傷もあり、古くて廃品にした方が良さそうだ。

梯子を上った時の傷も、応急処置のテープが張られたまま残っている。

それでも、ゼイラが作られた時は、輝かしかつたに違いない。

瞳は高価なクリスタルガラスだし、体の形を見ても無駄のない美しさがある。

おそらく、その部品は質の良いもので作られているのだろう。

自分はゼイラを馬鹿にしていたけれど、希少価値があるのかもしれないとも思う。

蓮はそう思いながら、ゼイラにどう接していいのか分からなくなっていた。

突然、ゼイラは目を開ける。

「充電が終了しました」

そのアナウンスと共にロックは解除され、ゼイラは蓮の前に立つ。そして言った。

「行きましょう」

それからまもなくして、蓮はバックパックを背負い、ゼイラを連れてパーシヴァルへ向かっていた。

父親が、嵐が来て湖の水かさが増せば向こう岸につけるはずだ、と言っていたことを覚えている。

ゼイラがいて、自分一人でないのも心強い。
それは、15歳の少年が考えた冒険で、湖を自分だけで漕いで渡る
無謀さなど考えもしない。

夜になった。

前に父と行った時からすると、月が満ちていて、さほど暗くはない。
山頂の辺りは、木も少なかったから、かなり遅くまで歩くことがで
きた。

とは言え、気温は下がっている。

蓮は、テントを張っても焚き火をしなかった。
もう、両親は自分がないことに気付いているはずだと思う。
火を起こせば遠くから見えるし、薪を集める余裕もない。

蓮は、ゼイラがいること事態、自分の居場所が明らかになっている
ことを忘れていた。

そこが少年のすることなのかもしれない。

その時、蓮は、両親が自分の安否をどれほど心配しているか考えも
しなかった。

ただ捕まりたくなかったのだ。

両親は、蓮がいないことに気付くとすぐに行動を開始していた。
それでもゼイラが一緒なのは、いくらか安心できることだった。

ゼイラは、蓮を守るようにプログラムされている。

蓮はテントの中で、自分の冷たい体をスリーピングバックに入れ
る。

ゼイラは蓮の横に座り、寄り添い、体から熱を出して暖めた。

蓮は、心地よい暖かさの中で眠る。

そして蓮とゼイラは、明け方早くに出発し、午前中の早いうちに

パーシヴァルへ着いた。

思った通り、水かさは増している。

蓮はカヌーを出すと、ゼイラを前に、そして自分は後ろに乗ると、湖の中へ漕ぎ出す。

ここまで来れば、もう誰にも邪魔されないと蓮は安心する。

カヌーは一つしかないのだ。

カヌーは、ゆっくりと、渓谷の奥へと進んでいく。

嵐の後なのに、そこは全く静かだった。

心に余裕ができた蓮は、漕ぎながら辺りの自然を見る。

そして、なんて美しいのだろうと思った。

自分は、物心付くころから自然の中で暮らしている。

それに、少し前にも父とここへやって来た。

それでも蓮は、このように、自然が美しいと感動したことはなかった。

渓谷は両側から迫り、その間の湖は、前に見た時とは違った色をしていた。

嵐の後なので水は濁っているが、何かの鉱物が混ざっているらしい。それが、朝の斜めの光に乱反射して不思議な青い色を見せている。

渓谷の山に生えている木々は、嵐の雨に洗われたようにみずみずしい。

その鮮やかな緑は、夏の季節を歓ぶかのように力強く、湖の青と空の青によく似合っている。

カヌーのオールが、白い水しぶきを立て、水を蹴る音が静かに湖面を渡っていく。

それらの自然すべてが、まるで歌っているかのようだ。

そう、ここは生きている。

そんな風に蓮には思えた。

そしてカヌーの進む方を見る。
ゼイラの後ろ姿も見える。

その両手は、カヌーの両側をしつかりと掴んでいた。
ゼイラには怖いという感覚はないから、バランスを取っているらしい。

その時、蓮は、はっとした。

ゼイラは泳げない。

自分は、自然の中で対処できるよう教えられているけれど、カヌーの漕ぎ方は習ったばかりだった。

それに、今、湖は風もなく穏やで問題ないが、この先に何があるのか、父から聞いただけしか知らない。

蓮はその時、自分でさえ危ないのに、ゼイラのことを全く考えていなかったのに気が付いた。

ゼイラを守るのは自分しかない。

それなのに、自分が頼りなく思えて仕方がない。

そして、ゼイラが怖がっていないことが、より自分を信頼しているかのように思える。

蓮は先を急ぐ。

父の言っていた岩や木、木の朽ちたものが見えてきているから、向こう岸はもうすぐだ。

水の流れは緩やかだから大丈夫。

そう思いながら、一生懸命にオールを漕ぐ。

急に、オールが止まる。

そして、カヌーも何かにつかえたような感触がある。

水の中を見ると、湖の底が浅くなっていた。

オールで推しても引いても、カヌーは動かない。

蓮は、カヌーを降りて引つ張ることにした。ところが、降りてみると、足は深い泥に埋まり、抜けなくなる。もう、先に行くことも、カヌーに戻ることも出来なくなってしまった。

「どうしたのですか？」

ゼイラは蓮を見ると言った。

「泥にはまって動けないんだ」

蓮が答える。

ゼイラは、そのまま見ている。

何かを考えているようだ。

そして空を見た。

「もう、雨は降りません。

その内、誰かがあなたを捜しにここへ来るでしょう。

このまま待ちますか？」

そのゼイラの言葉に、蓮はいらついて言った。

「こんな所で立ち往生できるか！

何とか岸にたどり着くようにしないと！」

それを聞いたゼイラは、少し考えると、カヌーを降りる。

ゼイラの足も泥につかった。

「何をするんだ!？」

蓮は叫ぶ。

「あなたをカヌーに戻します」

ゼイラはそう言うと、蓮を持ち上げカヌーに乗せる。

それから自分は前へ行き、カヌーを引つ張り始めた。

ゼイラが降りて軽くなったカヌーが動き始める。
そして動けば動くほど、ゼイラは自分の重みで沈んでいく。
元々ゼイラには、こんな事も出来るはずはなかった。

「ゼイラ、もう止める！」

蓮が怒鳴る。

それでもゼイラは止めない。

しばらくすると、辺りに、岩や木が横たわっているものが増え始めた。

湖の終りにたどり着いたのだと分かる。

腰まで水につかったゼイラは振り向くと言った。

「私は、これ以上あなたと共に行くことはできません」
それは蓮にも分かっていた。

「お前が行かないなら、俺も行かない」

「あなたは、この先に見たいものがあつたのではありませんか？」

「お前が行かないなら見たくない。」

お前と一緒に見るつもりでここまで来たんだ」

蓮は子供のように言う。

ゼイラはカヌーを引き寄せ、泥で汚れた両手で蓮の両腕を掴むと言った。

「それでは、私の目を持っていけば良いでしょう」

「なんだって？」

蓮は驚いて言った。

「大丈夫です。」

ゼイラ型の目は人間とは違います。
アイマスクのようです。

ほら」

と言って、蓮の右と左の手を自分の顔の両側に当てる。
すると、カチツと両目と周りの部分のロックが外れる音がした。

蓮の腕は硬直する。

ゼイラも、そのまま動くのを止めた。

蓮の両手は、ゼイラの顔を挟んだままだ。

そうしてお互いは、カヌーの中と外から見つめ合う。

周りの音は消えたようになり、浅い水の流れがカヌーに当たる音が、
かすかに聞こえる。

蓮は、ゼイラの瞳は深い青色だと思った。

嵐の夜に見たゼイラの瞳は美しかったけれど、暗かったので、その
色までは分からなかった。

本来、クリスタルガラスに色はない。

その透明度の高さのゆえ、人は美しいクリスタルガラスに着色する
のだ。

ゼイラは目を瞑る。

そして言った。

「あなたが私の目を持っていけば良いでしょう。
この目は、体から離れても見ることが出来ます。
私は、そうして、あなたと一緒に見れるのです。
それで良いではありませんか？」

「いやだ」

蓮が言うと、ゼイラは目を開けた。

「私は解体されるはずでした。存在を終えるのです。」

ですが、私がここに沈めば、この体は長い時間をかけて、ゆっくりと解けていきます。」

そうして私の体は、あなたが見たかったものに流れていくのです。」

「では、俺の見たかったものは何だ？」

「それは、あなたが知っているではありませんか？」

蓮は、それに答えようとしない。

ゼイラは、最後に、ささやくように言った。

「私にそれを見せて下さい」

ゼイラは蓮の手を押す。

すると、蓮が押さえていたゼイラの両方の目はマスクのように外れた。

その時、一瞬、ゼイラの口元が緩む。

蓮には、感情を表さないゼイラが、微笑んだように思えた。

目を失ったゼイラは、力を込めてカヌーを先へ推す。

そうしながら、ゼイラは沈んでいき、カヌーを掴んでいた手も解けて、湖の中に消えていった。

蓮は、バックパックの下に着いていた小さなバッグを外すと中のものを出し、ゼイラの目を入れて腰に付ける。

そしてオールをカヌーの前へ投げると、その上を踏んで岩に乗る。さらに岩や倒れた木に飛び乗りながら岸に着くと、後ろを振り返らずに走った。

その先はすぐに開け、山脈の反対側に抜けたのだと分かる。

蓮は、大きな一枚岩の上に立っていた。川は無数に別れ、そこから下っていき、その下に広がる夏の草原に流れていく。そのほかには何も無い。

蓮は、バッグからゼイラの目を取り出した。小さな機械が動いている。

ゼイラの体に、信号を送っているようにも思える。それはまるで、ゼイラが、泥の中で、これを見ているのかのようだ。

蓮は、そこに立ちながら考える。目的を遂げたような気もするし、まだ何もしていないようにも思える。

この広い草原を見ても「ああ、そうなのだ」ぐらいにしか思えない。そして、ゼイラの目をバッグに戻し腰に付ける。それから両手を広げた。目を瞑り、風の音だけを聞く。

自分が鳥のようになって飛べたらいいのと思う。このまま飛んでしまえば、鳥になれるかもしれないとも思う。そうして、ゼイラと共にこの広い草原を飛び、この先にあるものが、本当にそれだけの世界なのかを知りたい。そう思うのだけれど、やはり、自分は人間だから飛べない、と空の心が答えるような気がする。蓮は、目を開けた。

次の瞬間、誰かが蓮の背中を掴んだ。蓮は振り向く。そこに俊樹がいた。

「父さん」

と蓮は言つて、急に、体から力が抜けていくのを感じる。

父は倒れ掛かる息子を、自分の腕の中にしっかりと抱きしめた。

6話 想い

「この人工衛星打ち上げ計画は、細部まで良く考えられているね」
智之の声に、蓮は我に返る。

そして、窓際に立ったままの自分に気が付いた。

「どうしたんだ？ 白昼夢か？」

智之が、からかうように言うと、蓮は窓から離れる。

「いえ、ちょっと思い出してたんです」

「ゼイラをか？」

蓮は、智之とテーブルを挟んで、反対側の椅子に座ると言った。

「まだゼイラは、あの湖に沈んでいるのかなって」

「いや、もう解けて無くなってしまっているだろう」

小さな部品は残っているかもしれないけどな。

どっちにしても、山脈の向こう側に流されてしまったんじゃないのかな」

「そうですね。ゼイラはそれを望んでいたし」

「え？ どういうことだ？」

「ゼイラがそう言ったんです」

「ゼイラが、そう望んだ？」

智之は、書類をテーブルの上に置くと言った。

「君も知っているように、ゼイラの記録は、あの嵐の過ぎた朝までしかない。」

最後に充電された時にアルコープに残された所までだ」

「そうでしたね」

「しかも、あの嵐の夜、ゼイラが横になってから後の、数時間の途中の記録が抜けていたんだ」

「ええ、調査員は、古いゼイラ型が横になったので、なんらかの故障が起きたと報告したらしいです」

「そうなんだが、ゼイラの見たすべての映像は、君が持っていた目の記録に残っていたね。

音は無かったから、君が何を言ったのかは口の動きでしか分からなかったけれど」

そして智之は、表情を緩めると続ける。

「あの嵐の夜、君が床の上で寝てしまっても、ゼイラはそのまま横になっていた。

君が寝返りを打つまでね。

そして君をベッドへ戻し、壁際に戻って立っていた。

数時間後に嵐が過ぎ、朝になると、アルコープに残っていたのと同じ記録が始まる。

君がベッドで寝ていて、ゼイラが充電用アルコープに戻るまでのだ」

「父は、ゼイラが自分の意思で、アルコープの記録を消したんじゃないかと言っていました」

「僕もそう思うよ。」

ゼイラに感情のようなものが生まれていたんだ。

強い想いがあったから、そんなことをしたんだろってね」

「ゼイラの強い想いって何だったんでしょうか」

思わず出た言葉に、蓮は自分で驚く。

それに対し、智之は真っ直ぐに蓮を見て言った。

「君は、本当に分からないのか？」

蓮は思う。

知らないはずはなかった。

考えないようにしていただけだ。

時が経ち、ゼイラを思い出し、今はそのことに素直になれる自分がいる。

蓮は椅子に深く寄りかかると言った。

「なんとなくは、分かる気がするんですが・・・」

「あの最後の夏、ゼイラに感情のようなものが生まれ、それは少女みたいなものだったのかもしれない。

僕は君のお父さんと、何度もそのことについて話したんだけどね。

あれは、ゼイラの初恋だったんじゃないかってね」

「え？」

「いや、初恋のようなものと言った方がいいかもしれない。

もしあれが人間の少女だったらね。

古い型の秘書用アクトロイドに、少女と言うのは語弊があるかもしれないが、思考能力は子供レベルだったからね」

「ゼイラは、そのことを知ってたんでしょうか？」

「知らなかったと思うよ。」

それを理解できる機能もなかったしね。

ゼイラは、自分の中に新しく生まれた感情に従って動いていたただだ。

初恋だったから隠そうとしたし、君を助けようともしてなかったね。

あの型が、あそこまで大胆になれたのは驚きだよ。

まあ、僕たちもはつきりしたことは分からないから憶測でしかないけれど」

「それは、プログラムを超えてプログレスした意思みたいなものと言われてますよね」

「そうらしいが、感情のある人間が作るから、そんな反応をすることも言うね。」

人間が、かつてにそう解釈しているだけだとも言っ意見もある。とにかく今は、すべてのアンドロイドにそれを制御する機能が入っている」

蓮は、くすつと笑って言った。

「だから、美咲がユージに恋心を抱く心配は無いんですよ」

「美咲は、それがなければかなり危ないね、大胆だし」

智之も笑いながら言った。

「それに」

と句切つて、智之もソファにゆったり座り直すと言う。

「君だって、ゼイラが何を言ったのか言わなかったじゃないか。」

君のお父さんも、当局がそれを探るのを許可しなかったし。

まあ、そんなことをしなくても、おおよその見当は付いていたけどね」

そして顔を上げて蓮を見る。

「君の想いは、『少年と犬』みたいなものだったんだ。」

最も、ゼイラにとつても、同じものだったかもしれないけれど。

とは言え、ゼイラが、君の见たいものに流れていきたかったのなら、僕たちの予想は正しいと思うよ」

蓮は黙って、それを否定も肯定もしない。

「とにかく君のお父さんは、君たちが山のどの地点にいるのか分かつてはいたんだが、気付くのが遅すぎた。」

それで、追いかけるより、地下避難道を使って反対側から行くこと

にしたんだ。

アンドロイドの救助隊も連れて行けるしね。

彼は、すぐに地下避難道の管理をしている僕に連絡し、自分は近くの駅へ向かうと告げたんだ。

最も、嵐の後に、道は寸断されていて大変だったらしいよ」

「ああ、それは何度も聞かされました」

と蓮は言っ、思い出し笑いをする。

「彼は必死だったからね。

そして救助隊と合流して、リニアモーターカーでパーシヴァルの近くへ出る駅に向かったんだ。

それに君は、ゼイラの目を持っていたから、見つけるのも簡単だったしね。

もしかしたら、それでゼイラは、君に自分の目を持たせたのかも知れない。

まあ、それは良かったんだけど、その目に残されていた映像のせいで、君のお父さんは大変なことになってしまったんだ。

アンドロイドが感情を持つ機能についても議論の最中だったし。惜しい人を失ったと思ったよ」

蓮は、智之をじつと見る。

そして言った。

「どういう意味ですか？

冗談は止めてください。

僕の両親は、今でも健在です」

智之は笑う。

「御免、御免。

だって彼は、あの騒動のせいで、もう二度と都市には戻らないって決めたんだよ」

「父は、初めからそのつもりでしたよ。

俺のために悩んでいただけです。

むしろ、あの事件で、決心が付いたんだと思います。

都市で情性で生きるよりは、息子に強く生きる姿を見せることにしたって母が言っていました。

俺はあの夏で、自分の生き方の方向付けは出来たものの、まだまだ未熟でしたからね。

結局、リ・インプリンティングもしなかったし」

「ああ、それもあって、彼はゼイラの瞳を貰い受けて君に渡したんだ」

「そうみたいです。

嬉しいような嬉しくないような、複雑な気持ちでしたが」

「それと共に、ゼイラが封印していた記録も貰ったんだろ？」

「ええ、見とけて。

あれは、一番されたくない罰でしたね」

智之は笑いながら言う。

「それがゼイラの想いだっただからね。

自分が仕出かしたことから、自分で責任を取らせるって言うってたよ」

蓮も苦笑いする。

「そのへんが、あの人らしいところですかね。

今でも、あの天文台で、自分の研究を好きなようにやっています。

あそこの暮らしも楽ではないのに。

母も、俺が高校を卒業したら、都市には住みたくないって言うって父の元に行ってしまうまし。

まあ、たまに都市の家へ戻ってくることはありますが、ほとんどは

山暮らしです」

「彼は、次世代は、真実と向き合わなければならぬって言うてるからね。

そのせいで大学を辞めることになってしまったけれど。

それでも、彼の生き方に感銘を受けている人は多い。

自然の力を信じているから、君の家も、都市の中なのに、まるで森の中にもいるみたいだしね」

蓮は、ため息をついた。

「美咲の部屋まで作って・・・

うちは女の子なんていたことなかったから、あの部屋を見た時は驚きましたよ。

美咲は喜んでるけど。

雪が解けて両親が戻って来た時、何て説明しようかと今から頭が痛いです」

「面白がるだろうね。

まあ、君のこの計画を知れば、喜んでくれるからいいじゃないか。自分の研究にも使わせてくれて言うよ。

それに、ユージのこともね。

いずれユージも、この計画に参加するかもしれないし」

「そうだといいですね」

「それで、ゼイラの見たかったものって何だったんだ？」

「ゼイラは、俺の見たいものを見たいって言ったんです」

「だから君は言いたくなかったのか？」

「まあ、それもありますが、あの時は、自分でもよく分かってなかったんです。

草原を見てもピンとこなかったですし。

それは後で、次第に分かってくるんですけどね。

俺の見たかったものは、再生した地球だったんだって。

あのパーシヴァルを、その名前の通りに、ゼイラと駆け抜けた時に抱いた印象みたいなものです。

もしかしたら、ゼイラにもそれが分かっていたのかもしれない、なんてね。

そんな高度なことが分かるはずないのですが」

「今度は、ゼイラは美咲の瞳で見るか・・・

そうか、だから君は人工衛星なんだ。

この都市を守るのだけが目的じゃないね。

いずれ、ここへは誰かが来る、そして、我々も外へ出て行くことになる。

世界は開かれていくんだ。

だから、コミュニケーションを取る為に君は英語を話すんだね。

君は、自分の見たかった世界を、ゼイラの瞳に見せたいんだ」

「そこまでは考えていませんでしたが、いや、そうなのかもしれない・・・

ゼイラは自分で言ったように、生きていなかったから死んでもいません」

「だから、ゼイラは、今でも君の中で生きているんだ」

蓮は、その智之の言葉に笑顔を見せる。

「あれは、俺が世の中に喪失感を抱いていて、自分がどのように生きるのか模索していた時でした。

ゼイラは、そんな俺とパーシヴァルへ行き、生きる動機を見つけるのを助けてくれました。

あの時、俺が知ったのは、自分がいてもいなくても、自然は力強く生きていくってことです。

それを知ることとは、ある意味、怖いことでした。

そして気が付いたのは、自分がどうこう言うより、その力に添って生きていけばいいということです。

あの時の俺は、ゼイラと鳥のように飛んで、その先にある世界を見てみたいと思いました。

俺の中のゼイラは、今でも、それを見せて欲しいと願っているんです」

蓮は、テーブルの書類の上に自分の手を置くと言った。

「だから、俺はのんびりしていられないんです」

「分かった、分かった。

とにかく、この件は何とかしよう」

智之が微笑みながら言うと、蓮も微笑み、二人は立ち上がる。

そして智之は、書類を持って部屋を出ていった。

蓮は一人になると、深く息を吐く。

そしてデスクにある椅子に座り、窓の方を向き、再び山脈を見た。

そこには、ゼイラと共に暮らした家がある。

蓮は、その家を去る前の、最後の夜のことを思い出した。

その夜、両親は天文台での仕事が忙しく、家にいるのは自分だけだった。

そして、ふと、父が見ろと言ったゼイラの残した映像を見ることにし、記録を取り出す。

見るつもりなんて更々なかったけれど、都市にまで持っていきたくない。

この家に置いていきたかった。

スクリーンに、その同じ部屋の床の上、ゼイラの瞳を通して横になつた自分の顔が映る。

音はなく、その口だけが動く。

それでも、あの嵐の音と、自分の声が甦ってくるような気がした。

「ゼイラの瞳は冷たいの？」

「クリスタルガラスって高価なんだろう？珍しいよね」

「じゃあ、ゼイラ型がなくなるって事は、もう、お前の瞳はなくなるんだ」

「ゼイラは、その瞳で何が見たいの？」

「世界を見たい。

父さんが言った、この世の終わりだ」

.....

これから大人になっていく少年の、蓮の目から、とめどもなく涙があふれ出た。

END

6話 想い（後書き）

このお話を、書くように励まして下さったシュリンケルさんへ送ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0365q/>

続・インプリンティング

2011年1月29日07時48分発行